

「学級がうまく機能しない状況」（いわゆる「学級崩壊」）の 実態調査と克服すべき課題

—1998年度と2019年度の学級状況調査を比較して—

増田 修治*・井上 恵子**

(2020年2月18日 受理)

Investigation of the actual Situation of “Classroom does not work well” (so-called “Gakkyū Hokai”) and Consideration of the issues to be overcome.

MASUDA Shuji* and INOUE Keiko**

はじめに

「学級がうまく機能しない状況」（いわゆる「学級崩壊」）については、当時の文部省が、1997年に「学級経営研究会」に研究委嘱し、1998年3月に最終報告書が発表された。⁽¹⁾

その最終報告書では、「学級がうまく機能しない状況」に対処していくために、次の六つの視点を提示している。

- (1) 状況をまずは受け止めること
- (2) 「困難さ」と丁寧に向き合うこと
- (3) 子ども観の捉え直し
- (4) 信頼関係づくりとコミュニケーションの充実
- (5) 教育と福祉、医療など境界を超える協力・連携
- (6) 考え工夫したり研修を充実するなど、考え試みる習慣と知恵の伝承

さらに、今後の取り組みのポイントとして

- (1) 早期の実態把握と早期対応
- (2) 子どもの実態を踏まえた魅力ある学級づくり
- (3) TTなどの協力的な指導体制の確立と校内組織の活用
- (4) 保護者などとの緊密な連携と一体的な取り組み
- (5) 教育委員会や関係機関との積極的な連携

の五つを掲げている。

これらの視点やポイントは、今でも色褪せているとは思わないが、この当時には考えられないような困難さが現在生まれていると筆者は考えている。特に、低学年においての困難さが増していると同時に、それ以降の学年にも困難さが引き継がれていると思える事例が見られるようになってきた。そうした低学年の問題行動には、幼稚園・保育園などの就学前教育にその一因があると考えられる。

「幼保小の連携」として、平成27年1月に国立教育政策研究所 教育課程研究センターが発行した『スタートカリキュラム スタートブック』が一つの方向性として提案されている。これを参考

*白梅学園大学 子ども学部 子ども学科

**白梅学園大学・白梅学園短期大学 子ども学研究所 嘱託研究員

に連携が進められており、「安心」「成長」「自立」の3本柱をもとに、入学初期のゆったりしたカリキュラムを通して学校へ慣れさせ、学びへスムーズにつなげる連続性が大切にされている。

そのような「スタートカリキュラム」が進められているのにも関わらず、2019年10月に発表された『平成30年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』⁽²⁾を見ると、暴力行為が、小1で3,335件、小2で4,311件となっており、平成18年度と比較すると小1が27.1倍、小2が18.1倍と増加している。途中で調査方法が変化したことを鑑み、平成29年度と平成30年度を比較してみた。すると、1年生が1.42倍、2年生が1.43倍、全学年でも1.3倍となっている。少子化が進んでいるにも関わらず、暴力件数が増えていることを考えると、幼保小の接続に新たな課題があると考えざるを得ない。この『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』の経年変化を見ると、驚くべき問題行動格差の縮小が見られた。平成18年度の1年生と6年生の格差が、132.3倍であったものが、平成30年度は1.9倍になっている。

また、「学級がうまく機能しない状況」（いわゆる「学級崩壊」）によって、教師が辞職している例も数多く見られるようになった。

佐々木・保坂・明石の「新任者教員のモチベーション研究」⁽³⁾によると、第一クライシス期における「児童掌握技術不足による学級崩壊の危険性」で、①仕事が後手後手になる ②満足のいく授業ができる技術がない ③授業中に児童の私語が気になり出す、しかり方の基準がない ④周りの学級より自分の学級が劣っているように見える、などのことが重なった結果、児童のトラブルが続出し、自信を失っていく様子が報告されている。

「低学年の荒れ」の問題、辞職する教師の増加などの問題も含め、現在の教育現場の状況をアンケートを通して分析し、1998年度の調査と比較することで、「どのような新しい課題や困難さ」が生まれているのかを浮かび上がらせていきたいと考え、この研究を始めることとした。

今回、東京都A市・B市・C市及び埼玉県D市の多くの教職員・教育委員会に協力していただくことができた。改めてお礼申し上げたい。

なお、この調査・研究については、白梅学園大学・短期大学「人を対象とする研究」に関する研究倫理審査委員会（申請番号 201832）を受審している。

第一章 本調査研究の概要と目的

1.本研究の目的

本研究では、前述の東京都3市と埼玉県1市の教育委員会の協力を得て行った。A・B・C市は市内の公立小学校、D市は市内の公立小中学校の教員を対象にした調査研究を行った。調査Aは「子どもたちや学校の状況」についての質問が37項目、調査Bは「学級の指導に困難さが増した原因」についての質問が22項目、最後に自由記述欄を設けている。

これらの項目についてそれぞれ分析し、現代の置かれている教育の現状や「学級がうまく機能しない状況」（いわゆる「学級崩壊」）が実際どのようなものなのかを明らかにすることを通して、教育現場の力になることを目的とする。

2. アンケート調査の概要

アンケート調査の目的は、「子どもたちや学校の状況」と「学級の指導に困難さが増した原因」を、教職員がどのように認識しているかを明らかにするものである。1998年度調査との比較をするという趣旨から考えると、本来調査校も同じでなければならないが、調査校が明らかになっていないことと、首都圏の学校の実態を明らかにすることを目的としたため、今回の調査方法をとることとした。

東京都A市の公立小学校教員401人、東京都B市の公立小学校教員486人、東京都C市公立小学校

教員188人、埼玉県D市の公立小学校教員1,007人、中学校教員618人、計2,700人を対象として行われ、小学校429人（20.6%）、中学校112人（18.15%）、計541人（20.0%）の方からの回答があった。ただし、今回の報告については、小学校のみとさせていただき、中学校の分析については今後の課題としたい。

方法は、無記名式・自記式のアンケート調査で、調査票の配布は東京都においては調査票と返信用封筒を入れたものを各小学校に送り、回収は一人ひとりが白梅学園大学に郵送する形で行った。埼玉県D市においては、教育委員会に調査票を一括して送り、各学校に調査票と返信用封筒を配布し、回収は東京都と同様、一人ひとりが白梅学園大学に郵送する形で行った。

第二章 調査結果について

1. 【学級状況調査A】「子どもたちや学校の状況」について

調査Aは、「子どもたちや学校の状況」について明らかにするためのものである。質問項目は、回答者の属性に関するものが5項目、「子どもたちや学校の状況」に関するものが次の37項目である。

表1 調査A「子どもたちや学校の状況」設問内容一覧

設問番号	設 問 内 容
(1)	子どもの学習集中度が高い
(2)	先生に反抗する子どもが増えている
(3)	友だちづきあいの苦手な子が多い
(4)	すぐカッとなって手を出す子が増えた
(5)	「よい子」を振る舞う子が増えた
(6)	いじめが広がっている
(7)	不登校の子が多い
(8)	職員間の仲がいい
(9)	子どもが生き生きしている
(10)	親が学校に協力的である
(11)	教育熱心な先生が多い
(12)	管理職のリーダーシップは高い
(13)	地域での学校の評判はいい方だ
(14)	「キレる」「うざい」などの言葉が目立つ
(15)	お菓子やマンガの持ち込みが目立つ
(16)	授業中立ち歩く
(17)	授業中無断で教室から出て行く
(18)	授業中、ゲームやボールなどで遊ぶ
(19)	授業中、マンガや雑誌を読む
(20)	授業中、こっそりお菓子を食べる
(21)	授業中、消しゴムや物を投げる
(22)	授業中、友だちをたたいたりけったり、いたづらをしたりする
(23)	授業が始まってもすぐにノートや教科書を出さない
(24)	テストや配布物を破ったり捨てたりする
(25)	学校で禁止されているものを持ってくる
(26)	弁当や給食が散乱する、片付けがうまくいかない
(27)	教師の注意や叱責に反抗する

(28)	弱い者いじめをする
(29)	担任が出張などでいないとき（自習中）に騒ぐ
(30)	他の学級の教師の注意や叱責に反抗する
(31)	人の物が隠されたりなくなったりする
(32)	携帯電話などを学校に持ってくる
(33)	先生に暴力をふるう
(34)	今、あなたの学級に担任が注意するとカッとなって反抗する子どもはいますか
(35)	あなたは、新卒から現在に至るまで子どもの生活指導上の問題で学級経営が困難になった経験がありますか
(36)	現在あなたの学校で子どもの『荒れ』や指導に疲れている方をご存じですか
(37)	あなたは学校にここ数年間（1～3年間）に子どもの『荒れ』や指導の疲れで退職された先生はおられますか

※回答者数は、小学校のみで429人である。

2. 「子どもたちや学校の状況」についての考察とまとめ

(1) 子どもの学習と精神面の成長について

①子どもの学習集中度と教師への反抗

「子どもの学習集中度」は、1998年度よりも高くなっているが、2019年度で50.3%となっており、集中度が高い児童と低い児童の2分の1ずつに二分化されていることがわかる。

「先生に反抗する子どもが増えている」では、2019年度の「そう思う」と「ややそう思う」の学年別割合は、次の通りになっている。

表2 先生に反抗する子どもの学年別割合

1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
22.7%	22.1%	27.4%	30.8%	23.9%	38.2%

これを見ると、「教師への反抗」が3・4年生の中学年で増え始め、5年生で一旦落ち着くが6年生で急増し、4割近くの教師が「教師への反抗」が増えていると答えている。中学年の学習が難しくなることで、「学習についていけない子ども」が多くなり、それが日々のむかつきにつながっていると考えられる。

また、6年生では学習の難しさに思春期特有の難しさが加わることで、反抗的な子どもが多くなると考えられる。

②「良い子」を振る舞う子どもたちと静かな荒れ

特に、【設問5】の「『よい子』を振る舞う子が増えた」が、2019年度で48.5%となり、1998年度の35.4%から大幅に増えていることから、大人や教師の前では「よい子」を演じている子が増えてきたと言える。

しかし、「よい子」として振る舞っているがゆえに、反抗できないし、しようとしないうちの子が増えてきていることも考えられる。「静かな荒れ」というものが広がりつつあるとも言えるのではないだろうか。

「静かな荒れ」とは、特に高学年に見られる現象である。教師がいくら質問したり、答えるよう

に促しても、一切無視をするのである。表面的に荒れているわけではないが、子どもの心の中には、学校教育や教師そのものへの不満が渦巻いている状況を言う。

1998年度は、学級崩壊が大きな問題となったが、教員に本音をおつけることができたと言える。現在の子どもは本音を言えず、「『よい子』を振る舞う子」が増えていることを考えると、自分の本心や本音を言える雰囲気を作り出していくことが、現代教育の課題となっていることが考えられる。

そうした本音をおつけたり、言い合える雰囲気にしていくには、もちろん学校の雰囲気や教師の力に左右される部分があるだろう。しかし、友人関係も大きな影響を与えている。

③子どもの人間関係

【設問3】で、「友だちづきあいの苦手な子が多い」が、現在でも71.3%であることを考えると、友人関係が「広く浅く」か「狭く深く」のどちらかになっていることが予想される。

筆者が、小学校三・四年生の学級生活について、「塾やお稽古漬けのために、細切れの時間を生きざるを得ない子どもの現状」や「秘密基地が作れなくなったことの影響」などを述べている。⁽⁴⁾つまり、人間の持っている「群居本能」が満たされていないのである。このことが与える「子どもの精神的な影響」を考える必要があるのではないだろうか。

また、「すぐカッと手を出す子」は、1998年度に比べると10.5%と3分の1以下になっており、俗に言う「キレる子ども」は少なくなっている。しかし、自由記述欄に見られるように、「キレる子ども」は減ったが「指示を聞けない子」が増えてきたという変化があると思われる。

(2) いじめの広がりとその背景

2019年度で「いじめが広がっている」について、「そう思う」「ややそう思う」が17.7%となっており、1998年度の7.9%から10ポイント近くも上がっている。

【設問5】とも関係するが、「よい子」という仮面をかぶっている中で、不満や鬱屈した気持ちを「いじめ」という形で解消している部分があるように考えられる。

今の子どもたちは仮面をかぶり、別人格を見せながら裏側で「いじめを行う」というペルソナ症候群が広がっていると見ることができる。「いじめは悪い」ということは、どの子どもも分かっている。そのため、「いじめ調査」などをしても、「いじめ」のことを書かない子どもが多い。分かっているからこそ、子どもたちは教師や大人の前では、極力見せないようにしたり、カモフラージュなどをする。

筆者は、岩手県矢巾町の「いじめ自殺」を調査し、書籍にまとめた。⁽⁵⁾その中で分かったことは、「被害者を挑発し手を出させることで『いじめではなく、ケンカである』とカモフラージュする姿」や「いじめではなく、いじりだよ」というように見せていることである。こうした子どもの特徴を把握しておくことが、いじめを防ぐためにも必要である。

(3) 不登校の子どもの増加

「不登校の子どもが多い」については、2019年度が52.9%で1998年度が48.7%となっており、若干増えている。

文部科学省が発表した「平成30年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」によると、不登校児童は年々増加しており、平成30年度は44,841人となり、過去最高を記録している。割合としても0.7%になっている。

文部科学省の、「不登校が高止まりしている」「増加傾向にある」という調査結果と一致した形になっている。学校そのものが、今の子どもたちにフィットしているのかを考察する必要になってくるであろう。

(4) 教員同士・親との関係性

「職員間の仲がいい」では、2019年度が80.7%で1998年度が64.1%になっている。

1998年度の調査では、20代・30代の教員が22%であったが、2019年度では62%となっている。若い教員の比率が高くなり、お互いに助け合ったり悩みを言い合える部分があるからであろう。

しかし、その反面、ベテラン層の急激な減少によって、悩みに対しての解決策やアドバイスを聞くチャンスが激減していることが問題点として浮かび上がってくる。特に、親との関係性が難しくなっている現状を考えると、学校のクッション役であったベテラン層がいなくなっているのは、大きな問題である。

反面、若い教師が増えてきたことでのプラス面も見られる。「子どもが生き生きしている」が、40%から76.5%に急増しているのは、若い教師が前向きに頑張っていこうという姿勢を見せることで、子どもとの関係性がはぐくまれていっている効果と言える。

厳しい労働環境といわれ、「ブラック職場」と言われながらも、若い教員がふんばっている様子が見えてくる。

【設問13】の「地域での学校の評判はいい方だ」で、53.4%が「良い」と答えている。1998年度が24.7%であるので、およそ2倍になっている。上記の部分と【設問11】とも関連してくるが、教育熱心な教師が数多くいることが、学校評価を底上げしている大きな要因であろう。

また、「親が学校に協力的である」でも、69.7%が協力的であると答えている。PTAの廃止論などが噴出している現状を考えたとしても、まだまだ学校への期待が高いことがうかがえる。

(5) 管理職のリーダーシップは高い

2019年度で「管理職のリーダーシップは高い」では、63.2%が「高い」と答えている。

1998年度の約3倍近くになっている。管理職が、リーダーシップを発揮している様子がうかがえる。

ただ、「リーダーシップ」をどうとらえるかの問題が残っている。教職員の意見をきちんと考え、踏まえた上での「リーダーシップ」なら良いのだが、全く無視して決定している管理職の話もよく聞く。

文部科学省が「チーム学校」という考え方を述べているが、チームになるには、「話をきちんと聞き、全員が納得する形を追求していくこと」が必要になってくる。

経営学の巨人と呼ばれている「ピーター・ドラッカー」は、『プロフェッショナルの条件』⁽⁶⁾の中で、「リーダーシップ」について、次のように述べている。

(1) リーダーシップとは「仕事」である

ドラッカーは、リーダーシップに必要な第一の要素を「仕事」とであると定義している。「組織の使命を考え抜き、それを目に見える形で明確に定義し、確立することである。リーダーとは、目標を定め、優先順位を決め、基準を定め、それを維持する者である。それらを“仕事として”発揮できる人が「リーダーシップのある人」なのである。

(2) リーダーシップとは“責任”である

リーダーたることの第二の要件は、リーダーシップを、地位や特権ではなく責任と見ることである。優れたリーダーは、常に厳しい。ことがうまくいかないとき、そして何事もだいたいにおいてうまくいかないものだが、その失敗を人のせいにはしない。

リーダーが責任を取ることで「部下を激励し、前進させ、自らの誇りとする」状態が実現し、部

下が自由に活動できるようになるのである。

(3) リーダーシップとは“信頼”である

リーダーに関する唯一の定義は、つき従う者がいるということである。ここでいう「つき従う者」、企業や組織でいう部下は、強制力をもって従わせられた者ではない。「信頼をもって、つき従う者」のことを指している。つまり、「部下から信頼を集めるのがリーダーシップであり、部下からの信頼を集める人間こそリーダーである」と、リーダーを定義しているのだ。

(6) 子どもの問題行動

子どもの問題行動の中で気になるのは、「キレル」「うざい」などの言葉であろう。1998年度が65.3%で、2019年度が47.3%になったことを考えると、そうした言葉が少なくなったことがわかる。しかし、教員の側は、約半数の子どもが「キレル」「うざい」という言葉を使っていると感じている。こうした子どもたちの中にある「ムカツキ」にどう対処していくかが、大きな課題である。本音の言えない状況の中の「ムカツキ」ほど苦しいものはない。

子どもに限らず、大人も、ネガティブ感情を持つのは普通のことだと考えるべきである。しかし、大人は子どもに「ポジティブさ」を求めがちである。ネガティブな感情とポジティブな感情の両方を持っているのが人間である。人間は、ネガティブさとポジティブさの間で揺れ動いている存在である。大切なのは、そのバランスをどのようにとるかである。

また、「ネガティブな感情」をうまく言葉にして伝えていくなどのことを、小さい時から教えていくべきであろう。例えば、筆者が担任した1年生で、「いつも1番になりなさい！」と親から言われていた子がいた。ある時、「体育館に行くから廊下に並んで」と言ったら、その子が3番になってしまった。その時、「1番じゃなかった。殺してやる！」と言ったのである。そうした時に、「そういうことを言ったらダメでしょ！」と怒ることが多い。しかし、それでは何もその子は変化しない。「1番じゃなくてくやしいだよね」と言い直させた。このように、ムカツキを相手に伝わる表現にしていくように促していく「翻訳者になること」が教師の仕事になってきているのである。

【設問15】の「お菓子やマンガの持ち込みが目立つ」では、1998年度が26%であったものが、2019年度には5.8%と、大幅に減少している。

しかし、筆者が訪問した学級崩壊のクラスは、ほとんどの子どもがお菓子やマンガの持ち込みをしていた。学級の秩序が崩壊すると、自分の嗜好品を持ってくるなどの行為に走るのである。学級崩壊クラスは、どれも担任が規律を確立しようと奮闘しており、子どもの力を借りるという発想がなかった。学級の規律は、ある日突然に崩れることがある。規律は、子どもたち自身の問題である。これからは学級の秩序を、子どもと共に考え、子どもと一緒に学級を創っていくという発想になっていくべきであろう。

3年生の担任が自由記述欄で、「教師の独善的な指導はもはや通用しないと考えてよい。子どもの言い分を聞かず指導にあたってしまうと、『指導困難な子ども』を作り上げてしまうが、それは教師が変わるべきだと思う」と書いている。

【設問16】の「授業中立ち歩く」では、2019年度で53.7%「ある」と答えている。「立ち歩く子どもがいる」と答えた教員が半数いることを考えると、この「立ち歩き」が1998年度より減ったとは言っても、大きな問題として存在していることが分かる。

次の表は、学年別に集計したものである。

表3 授業中、子どもが立ち歩く状況について

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	合計
なかった	24	20	23	34	57	41	199
たまにあった	33	41	32	24	30	26	186
よくあった	9	7	7	7	5	9	44
合計	66	68	62	65	92	76	429
「あった」の割合	63.6%	70.6%	62.9%	47.7%	38.0%	46.1%	

当然のことながら、1～3年生の教員が「立ち歩きが多い」と感じていることがわかる。小学校1年生の落ち着きのなさが、3年生まで続いている様子が見てとれる。

低学年では「いかに落ち着いた授業を展開していくか」、中学年では「落ち着きのなさをどのように克服していくか」という課題があることが分かる。

【設問17】の「授業中無断で教室から出て行く」では、1998年度が23.5%であったものが、2019年度が28%となっている。つまり、「無断で教室から出て行く」子どもが増えていると言える。

自由記述欄にもあるが、学級に支援が必要な子どもが増えたことと無縁ではないであろう。インクルーシブ教育の充実を促していくと同時に、支援体制・教員の増加などの問題を考えていく必要があると思われる。

【設問18】の「授業中、ゲームやボールなどで遊ぶ」では、1998年度が9.4%であったものが、2019年度で7.5%と、若干減っている。

こうしたゲームやボール遊びが広がる状況になることは、めったにないことである。しかし、「よくあった」と答えた回答者を詳細に見てみると、「学級崩壊についての項目15～35までの21項目中「よくある」が4項目で「たまにある」が9項目、合計13項目が当てはまった。

「授業中、ゲームやボールなどで遊ぶ」というところまで行くと、指導が全く入らない状況になることが分かった。

【設問19】の「授業中、マンガや雑誌を読む」では、1998年度が9.4%で2019年度が8.6%とほとんど変化がなかった。前設問の「ゲームやボールなどで遊ぶ」と比較すると、ハードルが少し低いことが考えられる。

【設問20】の「授業中、こっそりお菓子を食べる」では、3.1%が1.9%と減少しているが、18の設問同様、「授業中、こっそりお菓子を食べる」という行為は、かなりハードルが高いことがうかがえる。

【設問21】の「授業中、消しゴムや物を投げる」では、1998年度が48.5%で2019年度が23.8%と、およそ半減している。

しかしながら、その投げたものの中に、他者を誹謗中傷するものが入っていた時などは、注意をする必要があるだろう。「いじめ」の始まりが、そうしたイタズラと考えられるたぐいの中から発生することが考えられるからである。

【設問22】の「授業中、友だちをたたいたりけったり、いたづらをしたりする」では、減少してはいるものの、こうした行為は相変わらず多く、4割以上の教員が「ある」と答えている。こうした行為が、大きなトラブルにつながり、親が学校に相談に来るなどのケースが多くなっていると聞く。こうした行為については、きちんと言い分を聞き、ていねいに対応することが求められているのではないだろうか。

(7) 学習や学校生活に関する行動

【設問23】の「授業が始まってもすぐにノートや教科書を出さない」では、2019年度においても、72.9%と高い割合になっている。授業が始まった時の用意をしない児童が減ったのであるが、相変わらず授業準備が出来ていない児童が7割近くもいることを考えると、授業準備は大きな課題であると言える。

【設問24】の「テストや配布物を破ったり捨てたりする」では、1998年度と比較するとかなり減少したのだが、31.7%の教員が「あった」と答えている。少なくなったと言っても、テストや配布物を破ったり捨てたりする児童が、3割以上いることは、大きな問題である。

【設問25】の「学校で禁止されているものを持ってくる」では、1998年度が22.4%であったものが2019年度で49.9%となっており、倍増していることがわかる。

1998年度と比較して、ポイントが上がったものの一つになっている。3年担任のベテラン教師が自由記述欄で、

「教師の力不足ももちろんありますが、教室内での問題行動、学力不振などは『強すぎる教育』『放任』『過保護』『シングル家庭』などが土台にあって、指導はすれども改善はむずかしいと思います。」

と書いている。

「強すぎる教育」や教師や学校という権威に対しての、ささやかな抵抗であると考えられるのではないであろうか。あるいは、「禁止されたものを持ってくることでの仲間意識の共有」「スクールカーストを上位にするための一つの方法論」などが理由として考えられる。

【設問26】の「弁当や給食が散乱する、片付けがうまくいかない」は、設問25と同様、1998年度と比較してポイントが上がったものの一つになっており、弁当・給食の指導がうまく入っていかなくなっている状況が浮かび上がってきている。

【設問27】の「教師の注意や叱責に反抗する」では、教師に反抗的な子どもが、かなり減っていることがわかる。しかし、4人に1人以上の教師が、「反抗的な子ども」がいると答えている。こうした「注意や叱責に従わない子」に対しての指導で疲れている様子が、自由記述から見てとれる。

【設問29】の「担任が出張などでいないとき（自習中）に騒ぐ」では、「騒ぐ」と回答した教員が半数以上いる。また、【設問30】の「他の学級の教師の注意や叱責に反抗する」では、1998年度とほとんど変化しておらず、教員の4人に一人が、「子どもの反抗」を経験していることがわかる。

【設問31】の「人の物が隠されたりなくなったりする」では、1998年度に比べて少なくなったものの、4割近くの教員が「物隠しがある」と回答していることを考えると、依然として残っている問題であることがわかる。

【設問28】の「弱い者いじめをする」では、2019年度でも51.7%の教員が「あった」と答えている。文部科学省が2019年10月に発表した「平成30年度『児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸問題に関する調査結果について』」⁽²⁾によると、小学校において、1998年度が12,858件、2018年度で425,844件と33倍にもなっている。また、1998年度が0.17%だったものが6.6%となっている。1学年3クラスで約100人と考えると、6件以上のいじめがある計算になる。文部科学省が、「いじめの定義」を変えたり、認知件数をきちんと報告するようにしたことを抜きにしても、かなりの増加である。

(8) 教師と子どもの関係性と対教師暴力

【設問33】の「先生に暴力をふるう」では、1998年が3.1%で2019年度が9.6%になっている。なんと、約3倍にもなっている。これは、見過ごせない問題だと考えている。

この問題は、後に詳細に分析してみたい。文部科学省が毎年調査している「児童生徒の問題行動・不登校生徒指導上の諸問題に関する調査結果について」⁽²⁾の暴力行為を経年一覧表にすると、次のようになった。

表4 「児童生徒の問題行動の2006年度～2018年度までの経年変化

	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
6年生	1,720	1,981	2,607	2,551	2,449	2,587	2,958	3,430	3,217	4,155	4,784	5,091	6,450
5年生	869	1,309	1,419	1,614	1,622	1,672	1,969	2,509	2,649	3,318	4,097	4,806	6,353
4年生	529	834	930	1,106	1,062	1,117	1,360	1,784	1,988	2,677	3,605	4,274	5,744
3年生	316	470	544	689	710	681	1,022	1,277	1,316	2,102	2,961	3,893	4,914
2年生	238	315	336	554	501	476	653	856	1,017	1,804	2,583	3,020	4,311
1年生	123	202	227	300	287	266	394	500	621	1,098	1,720	2,356	3,335
合計	3,795	5,111	6,063	6,814	6,631	6,799	8,356	10,356	10,808	15,154	19,750	23,440	28,049

この中で、特に2006年度と2018年度を比較すると、次のようになった。

表5 2006年度と2018年度の比較

小1	27.1倍
小2	18.1倍
小3	15.5倍
小4	10.9倍
小5	7.3倍
小6	3.8倍

ただ、この調査については、文部科学省が暴力行為についての申告基準を変化させたので、同じ基準で報告している1年間の変化を見てみると、次のようになった。(2017年度と比較すると)

- ①全体 23,440人 → 31,107人 (33%増)
- ②1年生 2,356人 → 3,335人 (41%増)
- ③2年生 3,020人 → 4,311人 (43%増)
- ④3年生 3,893人 → 4,914人 (26%増)

また、次のように驚くべき問題行動の格差が縮小している様子が見られた。

表6 問題行動の縮小について

	1年生	6年生	格差
2006年度	123人	1,720人	132.3倍
2018年度	3,335人	6,450人	1.9倍

低学年の暴力行為の激増と、全体的に暴力行為が増えていることが分かる統計になっている。それでは、「対教師暴力」はどうなっているのだろうか。

平成30年度(2018年度)では、5,408件となっており、4校に1校の割合で「対教師暴力」が起きている。

こうした結果から考えると、アンケート調査の結果の方が割合としては高いことがうかがえる。どちらにしても、「対教師暴力」が増加したことは間違いないことがわかる。

【設問34】の「今、あなたの学級に担任が注意するとカッと反抗する子どもはいますか」では、1998年度の半分になっている。そうは言っても、設問33と関連して考えると、反抗が暴力的

になっていると考えられる。

2019年度で「今、あなたの学級に担任が注意するとカッとになって反抗する子どもはいますか」では、「現在複数名いる」「現在1名いる」という回答者は、66名で15.4%であった。1998年度が28.5%であったことと比較すると、およそ半数になっている。

しかしながら、設問33との関連性を考えていく必要があるであろう。

設問34で、「注意するとカッとなる」が「1名いる」が57名、「複数名いる」が20名であった。設問33の「先生に暴力をふるう」という設問とクロスマッチさせた結果は、次の通りであった。

表7 注意をするとカッとする子どもの人数とその割合

	暴力がない	たまにある	よくある
カッとなる子が1名いる	38人 (66.7%)	17人 (29.8%)	2人 (3.5%)
カッとなる子が複数名いる	11人 (19.3%)	7人 (12.3%)	2人 (3.5%)

ここから分かることは、「カッとなる子がいること」と暴力につながっているケースは、28人で36.4%であった。キレやすい子がクラスにいる場合には、3分の1の確率で暴力が存在していることが分かった。

【設問35】の「あなたは、新卒から現在に至るまで子どもの生活指導上の問題で学級経営が困難になった経験がありますか」では、1998年度よりは少なくなったとは言っても、2019年度で56.2%が「あった」と答えています。「学級経営が困難になった経験がある」と答えた教員が6割近くいることを考えると、見逃せない問題である。今の教員にとって、授業だけでなく学級を創っていくことも大きな課題となっていることがわかる。

今、〇〇小学校スタンダードやゼロトレランスが広がっている。そうした方法は、一定の効果がある反面、「どうしてその規則や決まりが必要なのか？」ということを経験自身が考えることをやめてしまう可能性があることも考慮すべきであろう。また、規則を厳しくすればするほど、それを守らない友人に対して排他的になることが指摘されている。「民主的な学級をどう創っていくか」という問いかけを、子どもたちに行っていくべきである。

【設問36】の「現在あなたの学校で子どもの『荒れ』や指導に疲れている方をご存じですか」では、「いる」と答えた方が50.3%もいる。1998年度よりは下がったものの、大きな課題と言えるだろう。しかも、「複数名いる」と答えた教員が、3割近くいることは大きな問題である。

【設問37】の「現在、あなたの学校でここ数年間（1～3年間）に子どもの『荒れ』や指導の疲れで退職された先生はおられますか」では、「複数名いる」「1名いる」という回答者が34.3%で、1998年度の14.7%を大きく上回っている。

特に、「複数名いる」と答えた教員が、1割近くいるということは、「困難さを共有できる職場であるか」「助け合える雰囲気があるか」などに関係している。しかも、複数名退職した場合、首都圏では代替教員（講師）が見つからないという問題が起きており、地方でも大きな問題となっている。

2018年7月に共同通信が調査した結果、「全国47都道府県と20政令指定都市のうち、26都道府県と9市で公立の小中高の教員が、定数に対し少なくとも計600人不足していた」とのことであった。

定年による大量退職や、若手の志望者減などが背景にある。また、人員不足が続けば授業の実施が困難になったり、1人当たりの業務量が増加する。また、「民間と人材の取り合いになっている」との指摘もある。

筆者の知っているある教員は、有名私大出身である。その教員が、「教師を続けるかどうか」で

悩んでいた。聞いてみると、「同じ大学出身の人がいい会社に勤め、年収1000万近くもらっている。しかも、休暇もしっかりとれている。なんでこんなに苦しい思いをしてまで、教師を続けなければいけないのかがわからない。この仕事はやりがいがあると思うが、労働条件から考えるととても合わないと思う。時給で計算したら、マクドナルドの時給の半分だった。子どももいるのに、我が子に十分力を注ぐことも出来ない。こんなに自己犠牲を払わなくてはいけない仕事はないと思う。」と涙ながらに語ってくれた。

「働き方改革」だけでなく、教育本来の在り方をどのように実現するかを考えなくてはならないと同時に、「教育が破綻するのではないか」という危機感を持たざるを得ない調査結果であった。

3. 「学級の指導に困難さが増した原因」についての調査結果

調査Bは、「学級の指導に困難さが増した原因」について明らかにするためのものである。また、教員が保護者（家庭）や社会、そして学校組織をどのように把握しているかをみるものである。20年の変化は子どもの生育環境に何をもたらしたのだろうか、1998年調査とほぼ同様の質問項目と新たに設定した項目（問12と問16を加えて）結果を見ることにする。

表8 調査B「学級の指導に困難さが増した原因」設問内容一覧

設問番号	設問内容
(1)	親が家庭で子どもを甘やかし過ぎる
(2)	親が子どもを受験競争に仕向ける
(3)	親が子どもに学習塾や習い事を強要する
(4)	親自身の自立に問題がある
(5)	子どもの数が少なくなった
(6)	子どもの放課後のふれあいが少なくなった
(7)	刺激の強いテレビゲームやマンガの影響
(8)	物を作ったりする体験が不足している
(9)	マスコミの影響
(10)	子ども自身の耐性が希薄になった
(11)	子ども自身のモラルが育っていない
(12)	自分が勝手な行動をしていることを、他の子どものせいにする
(13)	子ども自身が競争に巻き込まれている
(14)	子どもの生活経験がきちんと身につけていない
(15)	学校での学習が過密になった
(16)	学校での学習についていけない子が増えた
(17)	教師が多忙になった
(18)	学校行事が多すぎる
(19)	大人の社会の問題が影響している
(20)	教師の権威が低下した
(21)	教師の指導力に問題がある
(22)	荒れについての職員会議や校内研究の増加

4. 「学級の指導に困難さが増した原因」についての考察とまとめ

今回の調査は学校の（主として学級内）の子どもや親に対する教員の意識を探るものである。従ってこのB項目ではその原因を教員が保護者（家庭）や社会、そして学校組織をどのように把握して

いるかを問うている。1998年から20年の時代の変化は子どもの生育環境に何をもたらしているのだろうか。

子どもの生育環境を捉えるうえで必要な視点は少子化の進展と雇用問題であり、それが家庭や学校に及ぼす影響である。毎年発表される合計特殊出生率（2018年度現在1.42）を見ても、それが回復する兆しは極めて少ない。ちなみに2017年の出生率の先進諸国間での比較では、イタリアに次いで下から2番目の1.43である。90年代とはほぼ同様の数値ではあるが、今日の学校教育の現場では当時と異なる深刻な事態が進んでいる。

平成半ばから教員の1.5万人程度の退職者が毎年計上されており、ベテラン教員が減りつつある現場で若い教員が責任のある仕事を担っている。このことは退職教員たちがそれまで培ってきた教育技術をはじめ、保護者や子どもたちへの対応が難しく感じる教員が増えていることとして表れている。教員の多忙さはそのことを抜きにしては考えられない。加えて2020年度より改定される学習指導要領が実施され、ITや英語等の技術革新やグローバル化に対応したカリキュラムの変更がある等、教員たちに新たな課題の解決を余儀なくさせている。こうした社会的な背景を踏まえて、この調査を見ていく必要もある。しかしこのことは、発想を逆に見れば戦後世代や若者が長らく閉ざされてきた学校文化を変える契機となる可能性も指摘できる。

（1）今日の子どもを取り巻く環境

1990年代後半の小学生の親はおおむね60年代に生まれ、団塊の世代の社会変革の活動等をTVで見て育った。その時代はまだ学歴に基づく偏差値教育に色濃く支配されており、子どもの幸せと学歴は比例すると考えられていた。そして今日、その頃の小学生たちの多くが子育て中の親となり、多くは規範にも柔軟に対応し、子どもたちに受験勉強を強要もしていない。それどころか、女性たちは育てられた親たちのような専業主婦に限界を感じ、自分の時間を大切にしつつ低賃金ながらも経済的自立を実現してきていると言える。

子育て支援を担う幼児教育・保育施設や学童保育所も次第に充実し、学童期に入った子どもたちの多くは、そこでの放課後の時間を楽しむようになった（設問2・3・4・6参照）。しかしながら、部屋や運動場で過ごす子どもたちにモノづくりなどの体験が不足しがちなのはどちらの世代にも共通している（設問8・14）。近隣の大人たちとのふれあいの少ない環境は他人との交流を通じて形成されるはずのモラルの問題（設問11）にも通じている。

さらに現代の子育てがその親の子ども時代と大きく変化していることの一つに、ゲーム機などの普及による新たな生活環境の変化をあげることができる。質問の比較の条件から98年調査の〈テレビゲームやマンガ〉という表現（設問7）をそのまま用いたが、すでにこの語句そのものが時代おくれになり、回答者の教員は戸惑ったのではないだろうか。また、小型ゲーム機（DM等）やスマホを用いる子どもたちが増えてはいても、それを学校に持ち込むことはできない現状から、教員たちには確たる現実は見えにくく回答の値が低くなったと思われる。同様にマスコミについても影響を受けながら、子どもたちはすでにその空間を通りこしつつあるようにも思われる（設問9）。しかしながら、すでに夜中にゲームにのめりこみ、ゲーム障害による入院が必要とされている子どもたちもいる今日、時代を先取りしていく子どもたちにはどのような手立てが必要なのかを考えるべきであろう。

さらに、子育て中の親の意識の問題も取り上げられなければならない。子どもを甘やかしすぎる（設問1）ことに「そう思う」と「ややそう思う」の値が高いことも、以前より親そのものが優しくなくなったからなのか時代そのものの影響なのか、多方面から原因を探る必要がある。身勝手な行動を他人のせいにする（設問12）が63.6%もいることから、他責タイプの親が増えたことが分かる。他責タイプの親の増加は、当然他責タイプの子どもが増加につながる。そのため、子どもに注意を

すると、「僕だけじゃない!」「〇〇君もやっている」といった言葉が返ってくるが多くなっている。

受験などの競争的環境の子どもが少なくなりつつあるようだが、新たな問題として浮かび上がったのが、「学習についていけない子が増えた」とする回答が4分の3ほどあることである（設問16）。学習内容が過密すぎるのか、それとも教員の指導の仕方が理由なのか、設問1との関連で家庭学習をしなくなったのか、ここでもそれ以上の調査はしていない。しかしながら、学校行事や事務量が増えたことなどによる教員の多忙化の問題や、特別な支援を要する子どもたちの対応に悩む教員の姿にもつながっている。（設問17・18・自由記述）

（2）子どもの生活と遊び

学校生活についてはA項目の分析の中に数々の指摘があるので、ここでは放課後や休日の子どものたちの過ごし方について述べてみたい。

数年前に三多摩の1自治体で子どもの自由時間の過ごし方について、低学年児を対象に調査をした⁽⁷⁾。そこでは子ども達の生活の中にゲームが溶け込んでいる実態が明らかになったが、今やスマホやタブレットを含めてSNSの利用が当たり前になっている。「スマホに子守りをさせないで」と警告が発せられていても、便利さゆえに手放せないのが男女を問わず現実となっている。まして、ゲームとなれば、親世代から慣れ親しんできた世界でもあり、10年ほど前に見られていた風景がほとんどの家庭に見られるようになっている。ゲームについては医学的視点からいくつもの警告（日本医師会・日本小児医学会）がなされている。刺激の強いものは多くはないだろうが、ゲームはしてもマンガの読み方がわからない子もいることが教員から報告されてもいる。

戦後史の中で、子どもの文化は戦後すぐに始まった紙芝居などの大人との触れ合いの中で育まれてきた。また、はないちもんめや石けり・陣取りといった身体活動を伴った遊びやお手玉などの静的な遊びも、自由な発想や創造性の中で子どもたち相互の関係性を深めていた。それが同時期に刊行された少年サンデーや少年ジャンプ、少女フレンドやマーガレットといったマンガを主とした雑誌の回し読みが中高学年では盛んとなり、TVが普及すると鉄腕アトムやボクシングや野球などのスポーツを扱った手塚マンガや千葉マンガが全盛期を極めることになる。

1970年代にインベーダーゲームが入り込んでくるにつれ子どもたちは外遊びから室内遊びに向かっていった。80年代は校内暴力や家庭内暴力、学校の管理体制の強化に伴い出現した、いじめや不登校の問題が社会に周知されていた。そして90年代は児童殺傷事件などの多発し続ける学校現場の問題状況に、管理体制が強められた時期でもあった。90年代になると任天堂のゲーム機には親と子どもが夢中になり、全国的に普及を見た親子劇場も、児童文化財に指定された宮崎アニメなど身体を動かすより、＜見て楽しむ映像＞の世界が広がりを見せていったのである。そして底流にあった草野球といったスポーツも大人の指導が入るスポーツ少年団等にとってかわられていった。

しかし今日もなお、マスコミの影響については1998年当時より値は低いが依然として75%にも達していることは、マスメディアやバーチャルな世界の影響を子どもたちは強く受けていることが推察できる。

今や子ども期はそうした流れの中で人間同士が直接語り合ったり、仲良く過ごすすが伝わらなくなったりかけているのである。そして受験勉強は少子化と格差拡大の中でさほど重視されなくなり、子どもたちの世界（特に放課後）は学童保育や放課後子ども教室などの施設に囲われて過ごす子どもたちと、ゲームやスポーツにいそしむ子どもたちに二分化されていると言えるのではないだろうか。

（3）家庭・保護者の状況

今日の保護者の子どもへの対応を見ると、1998年に比べ甘やかしているわけでもなく学習塾や習

い事を強要しているわけでもない。大人の自立については、アンケートでは明らかにはなっていないが、なんらかの問題を抱えている家庭が多くなっていることが考えられる。子どもの耐性についても希薄になったと言っても、前回の調査ほどではない。

このB項目を見る限り、家庭や親の問題は特になく、穏やかな生活を思い浮かべることができる。しかし、自由記述を見るとそこには保護者への対応に悩む教員が多いことに気が付く。また、学校で「学級崩壊をもたらす子どもたち」の中に、家庭での問題を背負い登校してくる子どもたちが多く、自由記述の中に書かれている。自己肯定感が低かったり不安定であったりキレてみたりする子どもたちによく話を聞いてみると、親からの暴力等の悲しみを背負っていることが多い。

子どもが生まれ育つ家庭は閉鎖的な密室空間でもある。保護者は職場でのストレスを抱え、その解消を家庭に求める。育児との板挟みになる保護者にはイライラが募り、つい子どもをはげ口にしてしまう事例も多い。価値観の多様性も構成員間で解消されがたいのも現実である。子どもの成長を見つめ、楽しみにできる喜びを構成員各々が持ち、未来に希望を託せる環境整備が社会的にも求められている。

(4) 教員の多忙な勤務実態と校内環境

こうした中で、今日の教員たちは権威の低下や指導力に悩み、問題視し、職員会議や校内研究に期待している（回答20・21・22）。

しかしながら教員の勤務実態は、2019年日本教職員組合「教員の働き方改革に対する意識調査」によれば、平日の学校内の勤務時間平均は10時間53分で、2018年に実施した前回調査と比べ8分減少した。一方、自宅での仕事時間は49分で変わらず、64.8%の教職員が自宅に仕事を持ち帰ることが分かったという。さらに給特法改正案についてはタイムカードやICT等客観的な時間把握ができる環境を全学校に整えることが法的に位置付けられればガイドラインの実効性を担保できるが、変形労働時間制については導入できる状態にないとの見解も示している。ゆとりのない中での多忙化はA項目の分析に見られる事例でも明らかなように、若い教員たちの退職への道を開くことにも通じてくる。この問題についても何らかの対策が求められている。

また、2019年に起きた神戸市の小学校教員同士のいじめ事件（カレー事件）も記憶に新しい。こうしたいじめが広がっている状況は学校のいたるところに見られ、法テラスなどにも関係者からの相談が寄せられている等、決して子どもに限ったことではない。教員たちのパワハラについては子どもを巻き込んだ事例などもあり、閉鎖的な土壌の問題が指摘できる。そこでは年功序列の問題もさることながら、子どもに見られるような教員カーストの実態もあり、若い新任教員が苦しむことになる。情報を与えない、無視する、ひとりだけのけ者にするといった実態はきわめて陰湿であり、どこの職場でも起こりうる。加えて多忙な仕事内容は心身を疲弊させ、ストレスがたまりやすい。加害者は身近な人間をいじめることが恰好なストレスの解消をしているともいわれている。

こうした子どもたちがキレたり暴力的になると同様の状況は、長く続いた閉鎖的で権威的な学校文化がもたらしたのものである。そして、こうした状況が改善されていく必要があるだろう。

第三章 自由記述について

自由記述では東京3市と埼玉1市から合計188名の記述が寄せられた。そこには若き教員たちの学校教育に対する真摯な姿勢が読み取れた。東京も埼玉も記述した教員数が多いのは世代別に30代・20代・40代の順である。また男女別の件数を見るとさほどの違いはないが、三多摩3市では低学年で女性が男性を上回り、中高学年は男性の件数が多い。他方、埼玉1市ではどの学年も女性が上回り、3年と5年が高くなっている。また学年別に件数をみると三多摩3市の合計では各学年ともほ

ほぼ同数の推移であるのに対し、埼玉1市は高学年になるに従い増加しており、特に5年担任からは多くの記述が寄せられている。また、持ち上がりか否かについては高学年で東京都3市が同数（6年）、埼玉1市では持ち上がりがやや多い（5・6年）。

これらの記述を学年別に子ども、家庭・親、学校・教員、対応法と分けてまとめたが、それはすべて特別支援教育に携わる、あるいは専科や管理職の見解と極めて類似していることがわかる。無論、こうした多様な子どもたちが集められているのが特別支援教育の場であり、管理職は校内全般を管理する立場であるからでもある。

記述では頭ごなしに叱ることに反省する教員もいれば、教師の指導力などの力量形成が大切と説く教員や、家庭や保護者の生活態度を指摘する教員もいる。そして多くのそれらに対する処方も記されており、そこには多忙な労働環境の中で子どもや保護者へのかかわり方についての真摯な悩みが現れている。自らの対応の仕方を振り返り、その対応を学ぶには専門知が必要と専門機関とつながることや研修の重要性を感じ、また、ひとりではとても対処しきれないので支援するスタッフの配属も求めている。そしてこれは1998年の自由記述からは想定できなかった若い教員たちの叫びでもある。

1998年調査とは異なり、2019年は若手教員が多数を占めている。また、＜担任が初めて＞とする教員が前年度からの＜持ち上がり＞教員より多いという現象はかつての学校現場でも見られたが、今日増え続ける若い教員にとっては学級経営も校務もかなりの負担である。また、1998年の学級調査の自由記述でも子どもがコミュニケーションをとることより、キレて暴力的行為になることが明らかにされていたが、こうした現象は20年たった今日でも、（表向きは静かではあるが、）この問題は解消されていないことが指摘できる。

特に特徴的だったことが、「相手の気持ちがわからない」「自分の思い通りにならないと暴言や暴力につながる」「騒ぐが注意しても聞かない」「自分のやりたいことができない、思った通りにいかないというときにパニックを起こす」「相手の気持ちがわからない子が増えた」「善悪の判断基準の幅がせまい」「やりたくないを主張する」など、子どもに指示が通らない様子が多数書かれていることであった。

第四章 おわりに（提言・まとめ）

今回、この東京都3市と埼玉県1市の調査をして、教員からみた学校と家庭状況のある程度つかむことができた。ここに、提言・まとめとして、いくつかを提起したい。

1. 「発達障害」と思われる子の増加

自由記述の中で一番多かったのが、「発達障害」についての記述であった。「発達障害まではいかなないグレーゾーンの子が多く感じる。」「子どもの特性上（音や視覚）に反応してしまう子が増えた。」「何故キレるのかわからない子どもが増えている。」「子どもの発達上の課題が大きいように思います。（ADHD、アスペルガーの子）」などといった記述がかなり見られた。

そうした「発達障害」や「支援が必要な子ども」への対応に追われている状況が拡大していることがわかった。そうした子どもがパニックを起こしたり、教室から飛び出したりするので、その対応に追われている状況が起きており、1998年度と比較しての大きな相違であると考えられる。

支援が必要な子どもに対しての体制を、行政の側が整備することが早急に求められている。

2. 論理が通じない子どもの増加（キレる子の増加）

「教師の注意や叱責に反抗する」では、4人に1人の教師が反抗を経験している。それは、1998

年度のように教師の権威に反抗するというより、2019年度では「教師の注意がわからない」という子どもが増えたのが原因ではないかと考えている。「第三章の自由記述について」の中でも触れているが、「注意をしても、その意味や意図がわからない児童が多い」と記述が多数見られた。

次の絵は、「Rey-Osterrieth 複雑図形」⁽⁸⁾と呼ばれるものである。これを、調査対象校の中で、授業が成立せず、「学級崩壊」している5年生のクラスに2019年12月11日に実施したところ、次のように形のとれない子どもがいた。

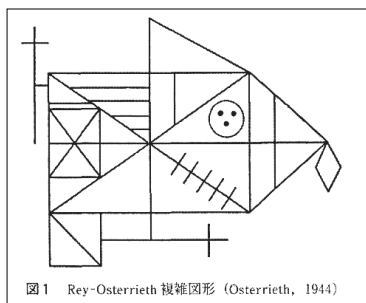
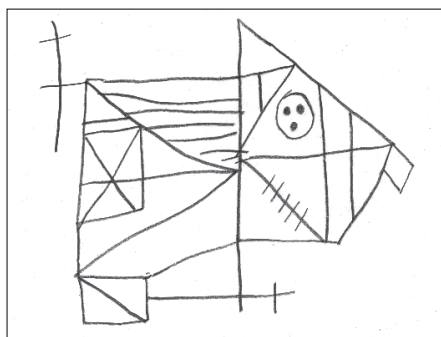
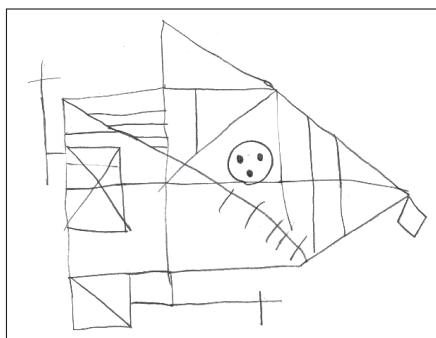


図1 Rey-Osterrieth 複雑図形 (Osterrieth, 1944)



こうした形がきちんと取れない子どもが、69人中25人(36.2%)もいた。(計測方法については、萱村俊哉・萱村朋子の「小学生におけるRey-Osterrieth 複雑図形の模写の発達」⁽⁸⁾を参照)

宮口氏は、その著書『ケーキの切れない非行少年たち』⁽⁹⁾の中で、面接と検査から浮かび上がってきた実態について、

こう述べている。

「しかし、一番ショックだったのが、
・簡単な足し算や引き算ができない
・漢字が読めない
・簡単な図形を写せない
・短い文章すら復唱できない
といった少年が大勢いたことでした。
見る力、聞く力、見えないものを想像する力がとても弱く、そのせいで勉強が苦手というだけでなく、話を聞き間違えたり、周りの状況が読めなくて対人関係で失敗したり、イジメに遭ったりしていたのです。そして、それが非行の原因になっていることを知ったのです。」

まとめると、「内省する力を持っていない」ということと「認知のゆがみがあるため、人の注意をそのまま受けとめることができない」ということなのである。

実際、この5年生のクラスは、1年生の時から落ち着かなかった。2年生になって学年崩壊し、それ以来落ち着いた中で授業を受けた経験がなかった。つまり、2年生から5年生までの4年間、授業をまともに受けた経験がないのである。また、教師の注意を、「自分のことがダメだと思っているんだ!」と言い返してくる。子どものためを思っている注意が、全く入らない状況であった。

特に問題だったのが、「教師の言うことを聞けば出来るようになる」という経験が学年全体にないことである。低学力の子どもが多い中、基礎学力を積み上げることが出来なかったため、5年生の授業が全く理解できない子が数多くいた。

授業を筆者が実施してみると、拾い読みの子が多かった。読む力が不足している子どもは、自己肯定感が低くなりがちである。しかも、読む力は全ての教科の基礎になるのである。この「学年崩壊」の中心になっている子どもの言葉が印象的であった。

「僕は、勉強ができない。このクラスには、できない人がたくさんいる。その人たちと一緒にクラスの授業を壊してしまえば、僕が勉強出来ないことが目立たないし、みんなが僕みたいに出来なくなれば、お父さんやお母さんから文句を言われなくて済む。だから、授業の邪魔をしているんだ。」

筆者はこの言葉を聞いて、子どもを批判できないと思った。子どもの哀しさが伝わってきたような気がしたからである。低学力のまま放置されてきた子どもは、自尊心が傷つけられている。その自尊心を取り戻す取り組みを早急にするべきである。

3. 子どもの群れる力を育てる⁽¹⁰⁾

小学校中学年において、「群れる」ということは、心の成長にとって欠かせないものである。元々人間は、群れをつくって生活することを好む傾向がある。このような傾向は、「群居本能」あるいは「群居性」⁽¹¹⁾と呼ばれている。この「群居本能」があるからこそ、集団が成立するのである。小学校中学年は、その「群居性」をもとに、遊びを中心として群れを作り、意見のぶつかりあいや楽しく過ごす経験を通して、社会性や創造性・協調性を育てていく。つまり、子どもにとって「群れて遊ぶ」ということが、精神的成熟を高めていくとも言えるのである。

今の中学年の子どもたちは、細切れの忙しい生活を送っている。「時間を忘れて遊び、夕焼けを眺める」などといった牧歌的状況は、ほとんど存在しないと言える。

このような中で注目したいのが、東京都千代田区で2013年4月から施行された「子どもの遊び場に関する基本条例」⁽¹²⁾である。その条例の最初に、次のようなことが書かれている。

(前略) 子どもが外遊びをするためには、「時間」「空間」「仲間」という3つの「間」が必要と言われている。しかし、今の子どもたちは、塾や習い事などで忙しく、また、室内でゲームなどをして過ごすことが多いことから、昔に比べて外で遊ぶ時間が少なくなっている。一方、都市化の進展により、空き地や原っぱが失われ、公園や広場では他の利用者にも配慮して制約が多いこともあり、子どもたちが自由に遊べる空間が少ないという現状がある。更には、少子化の進行により兄弟姉妹や近所に住む子どもが減少し、外遊びの仲間づくりが難しくなっている。かつては、広く社会に「子どもは外で遊んで学び、育つもの」という認識があり、子どもたちは、外遊びを通して人間関係や社会規範などを学び、体力や運動能力も自然と身に付けてきた。いつの時代の子どもたちにも、外遊びは欠かせないものである。

千代田区は、区を構成する全ての人々が連携・協力し、将来を担う子どもたちが、外遊びを通して健やかにたくましく育つことのできる社会を築くため、この条例を制定する。

[出典：「子どもの遊び場に関する基本条例」]

以上の前文のあと、次のようなことが書かれている「①子どもの成長過程における外遊びの必要性及び重要性を認識する。」「②利用可能な区有地を活用して遊び場を確保すること。」「③区立公園、児童遊園、広場等については、利用状況を勘案しながら運用方法を工夫することにより、子どもが可能な限り自由に遊べるよう配慮すること。」「④区民等は、子どもが外遊びをすることの必要性及び重要性を理解し、区が実施する施策に協力するよう努めるものとする。」「⑤小学生以下の児童及び幼児の保護者は、子どもが外遊びをするよう促す」と続いています。こうした取り組みが、子どもの群れる力を回復することになる可能性があると思われる。

4. 学校スタンダードについて

■広がりを見せるスタンダード

2017年10月29日、朝日新聞朝刊に「スタンダード」に関する記事が掲載され、広く世間にも知られることとなった。その一部を取り上げてみたい。

<小学校で見られるスタンダードの例>

【学習について】

使うノートや、行頭から文字を何マス下げるかなどを、学年ごとに規定。それをすべての生徒で統一するように、教員にも指導する

【生活について】

- ・登校から下校まで、学校において目指すべきふるまいを、文字やイラストで明示
- ・授業中の机の上に置く物の、置き方を統一する

【持ち物について】

- ・筆箱に入れる鉛筆の種類、本数、その他文房具の種類を、例えば「赤鉛筆1本、青鉛筆1本、定規は透明なもの1つ」などと決める
- ・道具箱に入れるものについても同様に規定

また、2019年7月1日の東洋経済オンラインにおいて、「小学校教師を『がんじがらめ』にする悪習の正体」という記事が流れた。その中で、多くの自治体や学校では、先生の裁量がひどく制限され、文字どおり「言われたことを、言われたとおりにやる」しかない状況が続き、その状況が年々悪化しているように見える自治体や学校もたくさんあることが語られ、その象徴的な例として「スタンダード」が次のように取り上げられていた。

その1つの象徴的な例が、「○○スタンダード」なるものです。すべての先生の授業の方法を統一し、時に「めあて」を何色のチョークで書き、「まとめ」を何色のチョークで囲むか、といったことまで決める授業スタンダードや、子どもたちの持ち物を統一し、時に机のどこにどの筆記具を置くかといったことまで決める学習規律のスタンダードなど。

かってあれほど、日本の教育の画一主義が批判され、その反省から、多様性の尊重や個に応じた指導などが言われるようになったのに、いつしか多くの自治体や学校が、またぞろスタンダードという名の画一化に舵を切るようになっていくのです。先に紹介した、何らかの「話型」をスタンダードにしている自治体や学校も少なくありません。 [出典：「東洋経済オンライン」]

スタンダードの背景には、ニーズや問題があまりに多様化しすぎた学校現場の混乱と、ベテラン教員の大量退職に伴って、経験不足の若手の先生が増えているという現状がある。

スタンダードに頼ると、教員も子どもも「きまりだから仕方がない」と考えることをやめてしまう。今求められるのは、一人ひとりの子どもの思いをていねいに聴き取っていく力なのではないだろうか。教員がそうした力を身につけていくことを大事にするべきである。

5. いじめをなくすには、「柔らかい学級作り」を

脳科学者の中野信子は、その著書「ヒトは『いじめ』をやめられない」⁽⁴³⁾の中で、「いじめを辞められない理由」を科学的・歴史的に解説している。

箇条書き的に紹介したい。

- ①人間は、種を残すために社会的集団を作ってきた。
- ②集団にとっての一番脅威になるのは、フリーライダー（ただ乗り）である。
- ③このただ乗りをする人を見抜く機能を、「裏切り者検出モジュール」という。
- ④これに対して行われる制裁行動を「サンクション」という。
- ⑤「相手を攻撃することは良くない」と理性的には知っている。
- ⑥一方で、人間の脳は、その理性的なブレーキを上回るほど攻撃することで、「快感を感じる」

ようにプログラムされている。

- ⑦この時に、快楽物質の「ドーパミン」が分泌される。
- ⑧人間はみんなと違う対象に制裁感情が発動する。（「向社会性」が高いほど発動）
- ⑨つまり、正義を振りかざして制裁することで、その「ドーパミン」が分泌されやすくなる。
- ⑩その他に、「オキシトシン」という愛情や親近感を感じさせるホルモンがある。
- ⑪愛する人や仲間と一緒にいることで、大きな幸福感を感じると「オキシトシン」が分泌される。
- ⑫このホルモンは、共同社会作りに欠かせない存在である。
- ⑬しかし、強すぎると、「嫉み」「排外感情」を高める。
- ⑭結果として、「規範意識が高い集団」ほどいじめが起きやすくなる。
- ⑮また、集団は、理性を鈍化する役目を果たす。（例：匿名性は、攻撃性を高める）

中野氏は、このような仕組みがあるため、いじめを止めるのは難しいと解説している。

こうしたことも含めて、筆者は「柔らかい学級作り」を提案したい。そのための方向性として、次の8項目が大切であると考えている。

- ①「友だち百人できるかな？」を目指させない。
- ②「スタンダード」に依拠しない学級作りを
- ③子どもの凝集性をほどほどにする。
- ④子どもへの言葉の二重性に気づく。（表側のメッセージと裏側の隠れたメッセージである「ヒドゥンメッセージ」に気をつける）
- ⑤荒れている子どもたちの内面の声を聴く。
- ⑥学校を、子どもにフィットするものにしていく。
- ⑦子どもの「自己決定権」を尊重する。
- ⑧学級を作るのは、子どもの力を抜きには考えられない。子どもの力に依拠して学級作りをし、子どもを学級の主人公にする。

こうした学級作りの必要性は、A項目の【設問5】『『よい子』を振る舞う子が増えた』が、35.4%から48.5%、【設問6】『いじめが広がっている』が、7.9%から17.7%に増加し、【設問28】『弱い者いじめをする』で、教員の半数以上が「あった」と答えていることなどからも、分かっていただけではないだろうか。

（6）学びの場を提供する大学に

さらに高等教育機関としての大学の立ち位置についてである。教員たちは真摯に質の高い教員を養成しようと努力を重ねている。しかし、学校現場と教えている理論とは距離があり、役に立たないという指摘も多い。＜実践＞と＜理論＞は本来不可分のものである。現場に役立つ研究を進めていく必要がある。現職教員がいつでも大学に来て担当教員と語り合い、教えあえるようなゼミ形式の生涯学習の場がより一層開けていくことも大事なことである。

また、養成系大学でのカリキュラムの中に、母親の困難さを含んだジェンダー教育を取り入れたり、白梅学園大学が提唱している「子ども学」を柱とした学びを深めていくなどのことが必要になってくると考えている。

引用・参考文献

- (1) 秋葉英則・松浦義満・坪井祥・藤原政俊 (1998) 『学級崩壊からの脱出—教師412人の実態調査—』フォーラムA
- (2) 文部科学省「平成30年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
- (3) 佐々木邦道・保坂亨・明石要一 (2010) 「初任者教員のモチベーション研究 I」『千葉大学教育学部研究紀要』第58巻pp29-36
- (4) 増田修治 (2015) 「群れなくなった中学年の子ども」『児童心理臨時増刊号 小学三・四年生の学級生活』pp11-17
- (5) 増田修治 (2017) 『「いじめ・自殺事件」の深層を考える岩手県矢巾町『いじめ・自殺』を中心として』本の泉社
- (6) P・F. ドラッガー (2000年) 『プロフェッショナルの条件—いかに成果をあげ、成長するか』ダイヤモンド社pp183-187
- (7) 井上恵子 (2010) 「子どもの遊びと生活に関する 1 考察—東京都下 A 小学校低学年児への質問とスケッチによる調査報告—」『研究年報』No15 白梅学園大学教育福祉研究センター
- (8) 萱村俊哉・萱村朋子 (2005) 「小学生におけるRey-Oserrrieth 複雑図形の模写の発達」『小児保健研究』第64巻第5号pp693-698
- (9) 宮口幸治 (2019) 『ケーキの切れない非行少年たち』新潮新書pp23-24
- (10) 工藤亘・藤平敦 (2019) 『生徒・進路指導の理論と方法』玉川大学出版部 増田修治担当「第3章 小学校中学年 第1節 児童理解と学級運営 第2節 学習指導における生徒指導」 pp65-73
- (11) 菊水健史 (2018) 「群れの機能と「安心」の神経内分泌学」『動物心理学研究』pp 1-9
- (12) 東京都千代田区「子どもの遊び場に関する基本条例」(2018年10月10日閲覧)
<https://www.city.chiyoda.lg.jp/koho/kosodate/kaigi/asobiba.html>
- (13) 中野信子 (2017) 『ヒトは「いじめ」をやめられない』小学館新書pp18-55

以下資料編

アンケート集計の結果の1998年度と2019年度の比較

構成とAアンケート

No. 1	質問項目	1998年度	割合 (%)	2019年度	割合 (%)
年齢構成	20代	5.3%		29.8%	
	30代	16.7%		32.2%	
	40代	66.3%		20.0%	
	50代	11.7%		15.5%	
	60代	わからない		2.6%	
男女	男	23.7%		43.4%	
	女	76.3%		56.7%	
経験年数	1～10年未満	11.5%		50.9%	
	10～20年未満	33.0%		27.5%	
	20～30年未満	52.5%		116.0%	
	30年以上	3.1%		10.1%	
担当学年	1年	14.5%		14.2%	
	2年	14.5%		14.6%	
	3年	16.4%		13.3%	
	4年	19.1%		15.9%	
	5年	19.1%		19.5%	
	6年	16.4%		13.5%	
	担任外	わからない		9.2%	
持ち上がり	今年初めて	77.5%		75.8%	
	昨年に引き続き	22.5%		24.3%	
1、子どもの 学習集中度が 高い	わからない	0.8%	0.8%	0.2%	0.2%
	全く思わない	8.4%	74.0%	4.7%	50.3%
	あまり思わない	65.6%		45.7%	
	ややそう思う	20.6%	25.2%	43.4%	49.4%
	そう思う	4.6%		6.0%	
2、先生に反抗 する子どもの 増加	わからない	0.0%	0.0%	0.9%	0.9%
	全く思わない	4.5%	37.7%	17.2%	71.5%
	あまり思わない	33.2%		54.3%	
	ややそう思う	43.0%	62.9%	22.1%	27.5%
	そう思う	18.9%		4.4%	
3、友だち付き合 いの苦手な子が 増えた	わからない	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	全く思わない	0.8%	20.8%	1.2%	28.7%
	あまり思わない	20.0%		27.5%	
	ややそう思う	47.2%	79.3%	55.9%	71.3%
そう思う	32.1%	15.4%			

No.2	質問項目	1998年度	割合 (%)	2019年度	割合 (%)
4、すぐカット なって手を出す 子が増えた	わからない	0.8%	0.8%	0.9%	0.9%
	全く思わない	2.3%	27.7%	8.6%	59.2%
	あまり思わない	25.4%		50.5%	
	ややそう思う	35.6%	71.6%	29.4%	39.9%
	そう思う	36.0%		10.5%	
5、「よい子」を 振る舞う子が 増えた	わからない	2.3%	2.3%	0.9%	0.9%
	全く思わない	8.0%	62.4%	3.3%	50.6%
	あまり思わない	54.4%		47.3%	
	ややそう思う	24.0%	35.4%	42.0%	48.5%
	そう思う	11.4%		6.5%	
6、いじめが 広がっている	わからない	5.7%	5.7%	2.3%	2.3%
	全く思わない	31.3%	86.4%	13.8%	80.0%
	あまり思わない	55.1%		66.2%	
	ややそう思う	5.3%	7.9%	15.4%	17.7%
	そう思う	2.6%		2.3%	
7、不登校の 子どもが多い	わからない	1.9%	1.9%	0.7%	0.7%
	全く思わない	12.1%	49.5%	16.1%	46.4%
	あまり思わない	37.4%		30.3%	
	ややそう思う	37.4%	48.7%	39.6%	52.9%
	そう思う	11.3%		13.3%	
8、職員間の仲が 良い	わからない	3.8%	3.8%	0.9%	0.9%
	全く思わない	5.7%	32.1%	2.6%	18.4%
	あまり思わない	26.4%		15.9%	
	ややそう思う	37.7%	64.1%	56.4%	80.7%
	そう思う	26.4%		24.2%	
9、子どもが 生き生きしている	わからない	6.4%	6.4%	0.7%	0.7%
	全く思わない	2.3%	58.1%	1.2%	22.8%
	あまり思わない	55.8%		21.6%	
	ややそう思う	34.3%	40.7%	66.7%	76.5%
	そう思う	6.4%		9.8%	
10、親が学校に 協力的である	わからない	1.1%	1.1%	0.7%	0.7%
	全く思わない	5.0%	53.5%	2.3%	29.6%
	あまり思わない	48.5%		27.3%	
	ややそう思う	39.3%	45.4%	60.1%	69.7%
	そう思う	6.1%		9.6%	
11、教育熱心な 先生が多い	わからない	3.8%	3.8%	1.9%	1.9%
	全く思わない	1.1%	22.4%	1.9%	18.7%
	あまり思わない	21.3%		16.8%	
	ややそう思う	53.6%	73.8%	61.3%	79.4%
	そう思う	20.2%		18.2%	

No. 3	質問項目	1998年度	割合 (%)	2019年度	割合 (%)
12、管理職のリーダーシップは高い	わからない	3.0%	3.0%	4.7%	4.7%
	全く思わない	25.9%	74.2%	7.0%	32.2%
	あまり思わない	48.3%		25.2%	
	ややそう思う	16.3%	22.8%	47.6%	63.2%
	そう思う	6.5%		15.6%	
13、地域での学校の評判はいい方だ	わからない	23.5%	23.5%	14.2%	14.2%
	全く思わない	4.5%	51.8%	3.7%	32.4%
	あまり思わない	47.3%		28.7%	
	ややそう思う	22.0%	24.7%	46.9%	53.4%
	そう思う	2.7%		6.5%	
14、「キレル」「うざい」などの言葉が目立つ	わからない	2.3%	2.3%	0.7%	0.7%
	全く思わない	1.9%	32.5%	9.8%	52.0%
	あまり思わない	30.6%		42.2%	
	ややそう思う	37.0%	65.3%	31.5%	47.3%
そう思う	28.3%	15.9%			
15、お菓子やマンガの持ち込みが目立つ	わからない	3.4%	3.4%	0.9%	0.9%
	全く思わない	26.4%	70.6%	73.7%	93.3%
	あまり思わない	44.2%		19.6%	
	ややそう思う	19.2%	26.0%	3.7%	5.8%
	そう思う	6.8%		2.1%	
16、授業中立ち歩く	なかった	34.4%	34.4%	46.4%	46.4%
	たまにあった	48.9%	65.7%	43.4%	53.6%
	よくあった	16.8%		10.3%	
17、授業中無断で教室から出ていく	なかった	76.5%	76.5%	72.0%	72.0%
	たまにあった	17.4%	23.5%	22.8%	28.0%
	よくあった	6.1%		5.1%	
18、授業中、ゲームやボールなどで遊ぶ	なかった	90.5%	90.5%	92.5%	92.5%
	たまにあった	8.3%	9.4%	7.2%	7.5%
	よくあった	1.1%		0.2%	
19、授業中、マンガや雑誌を読む	なかった	88.3%	88.3%	91.4%	91.4%
	たまにあった	10.6%	11.7%	8.4%	8.6%
	よくあった	1.1%		0.2%	
20、授業中、こっそりお菓子を食べる	なかった	97.0%	97.0%	98.1%	98.1%
	たまにあった	2.7%	3.1%	1.9%	1.9%
	よくあった	0.4%		0.0%	
21、授業中、消しゴムや物を投げる	なかった	51.5%	51.5%	76.2%	76.2%
	たまにあった	41.3%	48.5%	22.1%	23.8%
	よくあった	7.2%		1.6%	

No. 4	質問項目	1998年度	割合 (%)	2019年度	割合 (%)
22、授業中、 友だちを たたく・ける	なかった	34.2%	34.2%	57.8%	57.8%
	たまにあった	53.5%	65.8%	39.9%	42.2%
	よくあった	12.3%		2.3%	
23、授業が始まって もすぐにノートや 教科書を出さない	なかった	11.5%	11.5%	27.0%	27.0%
	たまにあった	43.3%	88.5%	60.1%	73.0%
	よくあった	45.2%		12.8%	
24、テストや配布 物を破ったり 捨てたりする	なかった	48.3%	48.3%	68.3%	68.3%
	たまにあった	45.2%	51.7%	30.1%	31.7%
	よくあった	6.5%		1.6%	
25、学校で禁止 されているもの をもってくる	なかった	77.2%	77.2%	50.1%	50.1%
	たまにあった	22.4%	22.4%	48.0%	49.9%
	よくあった	0.4%		1.9%	
26、弁当や給食が 散乱する、片付けが うまくいかない	なかった	81.3%	81.3%	68.8%	68.8%
	たまにあった	15.6%	18.7%	29.1%	31.2%
	よくあった	3.1%		2.1%	
27、教師の注意や 叱責に反抗する 立ち歩く	なかった	52.7%	52.7%	71.1%	71.1%
	たまにあった	40.8%	47.3%	27.3%	28.9%
	よくあった	6.5%		1.6%	
28、弱い者いじめ をする	なかった	26.6%	26.6%	48.3%	48.3%
	たまにあった	63.5%	73.4%	49.9%	51.7%
	よくあった	9.9%		1.9%	
29、担任の出張中 や自習中にさわぐ	なかった	37.9%	37.9%	45.6%	45.6%
	たまにあった	50.2%	62.1%	49.6%	54.0%
	よくあった	11.9%		4.6%	
30、ほかの学級の 教師の注意や叱責 に反抗する	なかった	73.4%	73.4%	74.1%	74.1%
	たまにあった	20.9%	26.6%	23.8%	25.9%
	よくあった	5.7%		2.1%	
31、人の物が隠さ れたりなくなった りする	なかった	43.3%	43.3%	60.4%	60.4%
	たまにあった	51.3%	56.6%	38.5%	39.6%
	よくあった	5.3%		1.2%	
32、携帯電話 などを学校に 持ってくる	なかった	98.1%	98.1%	89.3%	89.3%
	たまにあった	1.5%	1.9%	9.1%	10.7%
	よくあった	0.4%		1.6%	
33、先生に 暴力をふるう	なかった	97.0%	97.0%	90.4%	90.4%
	たまにあった	2.7%	3.1%	7.7%	9.6%
	よくあった	0.4%		1.9%	
34、カッとなって 反抗する子	4月からいない	60.5%	60.5%	69.0%	69.0%
	当初いたが今はいない	11.0%	11.0%	15.6%	15.6%
	現在1名いる	15.6%	28.5%	12.4%	15.4%
	現在複数名いる	12.9%		3.0%	

No. 5	質問項目	1998年度	割合 (%)	2019年度	割合 (%)
35、学級経営が 困難になった経験	なかった	34.0%	34.0%	43.8%	43.8%
	あった	66.0%	66.0%	56.2%	56.2%
36、子どもの 『荒れ』や指導に 疲れている先生	わからない	37.4%	37.4%	35.0%	49.7%
	いない			14.7%	
	1名いる	22.7%	64.0%	21.2%	50.3%
	複数名いる	41.3%		29.1%	
37、数年間に子ども の『荒れ』や 指導の疲れで 退職した先生	わからない	4.5%	4.5%	27.5%	27.5%
	いない	80.7%	80.7%	38.2%	38.2%
	1名いる	13.6%	14.7%	21.4%	34.3%
	複数名いる	1.1%		12.8%	

アンケート集計の結果の1998年度と2019年度の比較

Bアンケート

No. 1	質問項目	1998年度	割合 (%)	2019年度	割合 (%)
1 親が家庭で 子どもを甘やかす すぎるから	わからない	1.5%		0.5%	
	全く思わない	1.1%		4.4%	
	あまり思わない	13.3%		4.3%	
	ややそう思う	42.4%	84.1%	43.4%	50.9%
	そう思う	41.7%		7.5%	
2、親が子どもを 受験競争に しむけるから	わからない	1.9%		1.2%	
	全く思わない	1.5%		19.1%	
	あまり思わない	11.7%		55.0%	
	ややそう思う	44.7%	84.9%	20.7%	24.7%
	そう思う	40.2%		4.0%	
3、親が子どもに 学習塾や習い事を 強要するから	わからない	0.8%		0.7%	
	全く思わない	1.5%		2.3%	
	あまり思わない	15.2%		31.2%	
	ややそう思う	47.0%	82.6%	51.7%	65.7%
	そう思う	35.6%		14.0%	
4、親自身の 自立に問題がある から	わからない	4.2%		1.4%	
	全く思わない	0.8%		7.7%	
	あまり思わない	8.7%		43.4%	
	ややそう思う	39.5%	86.3%	33.6%	47.6%
	そう思う	46.8%		14.0%	
5、子どもの数が 少なくなったから	わからない	4.2%		0.9%	
	全く思わない	7.7%		3.3%	
	あまり思わない	38.8%		47.3%	
	ややそう思う	35.5%	51.3%	42.0%	48.5%
	そう思う	15.8%		6.5%	
6、子どもの 放課後のふれあひ が少なくなったか ら	わからない	1.5%		2.3%	
	全く思わない	1.9%		13.8%	
	あまり思わない	13.0%		66.2%	
	ややそう思う	46.9%	83.5%	15.4%	17.7%
	そう思う	36.6%		2.3%	
7、刺激の強い テレビゲームや マンガの影響	わからない	1.5%		0.7%	
	全く思わない	0.8%		16.1%	
	あまり思わない	6.4%		30.3%	
	ややそう思う	36.2%	91.3%	16.1%	16.8%
	そう思う	55.1%		0.7%	

No. 2	質問項目	1998年度	割合 (%)	2019年度	割合 (%)
8、物を作ったりする経験が不足しているから	わからない	3.4%		0.9%	
	全く思わない	1.5%		2.6%	
	あまり思わない	14.4%		15.9%	
	ややそう思う	44.1%	80.6%	56.4%	80.6%
	そう思う	36.5%		24.2%	
9、マスコミの情報の影響	わからない	1.5%		0.7%	
	全く思わない	1.1%		1.2%	
	あまり思わない	8.3%		21.7%	
	ややそう思う	37.9%	89.0%	66.7%	76.5%
	そう思う	51.1%		9.8%	
10、子ども自身の耐性が希薄になったから	わからない	0.4%		0.7%	
	全く思わない	0.4%		2.3%	
	あまり思わない	4.5%		27.3%	
	ややそう思う	33.2%	94.7%	60.1%	69.7%
	そう思う	61.5%		9.6%	
11、子ども自身のモラルが育っていないから	わからない	2.7%		1.9%	
	全く思わない	1.1%		1.4%	
	あまり思わない	15.9%		15.4%	
	ややそう思う	40.9%	80.3%	61.5%	81.3%
	そう思う	39.4%		19.8%	
12、自分の勝手な行動を、他の子どものせいにするから	わからない			4.9%	
	全く思わない			4.7%	
	あまり思わない			26.8%	
	ややそう思う			41.0%	63.6%
	そう思う			22.6%	
13、子ども自身が競争に巻き込まれているから	わからない	2.3%		3.3%	
	全く思わない	1.9%		9.1%	
	あまり思わない	15.9%		59.2%	
	ややそう思う	39.8%	80.0%	23.1%	28.5%
	そう思う	40.2%		5.4%	
14、子どもの生活習慣がきちんと身についていないから	わからない	1.5%		0.9%	
	全く思わない	0.8%		1.6%	
	あまり思わない	12.1%		17.2%	
	ややそう思う	46.8%	85.7%	52.0%	80.2%
	そう思う	38.9%		28.2%	

No. 3	質問項目	1998年度	割合 (%)	2019年度	割合 (%)
15、学校での学習が過密になったから	わからない	0.8%		2.3%	
	全く思わない	1.1%		1.9%	
	あまり思わない	17.9%		32.4%	
	ややそう思う	39.5%	80.2%	47.1%	63.4%
	そう思う	40.7%		16.3%	
16、学校での学習についていけない子が増えたから	わからない			2.3%	
	全く思わない			2.3%	
	あまり思わない			28.2%	
	ややそう思う			52.4%	67.1%
	そう思う			14.7%	
17、教師が多忙になったから	わからない	1.5%		3.0%	
	全く思わない	0.4%		1.2%	
	あまり思わない	11.4%		14.5%	
	ややそう思う	46.2%	86.7%	38.7%	81.4%
	そう思う	40.5%		42.7%	
18、学校行事が多すぎるから	わからない	2.3%		1.2%	
	全く思わない	6.5%		3.0%	
	あまり思わない	51.7%		33.6%	
	ややそう思う	27.8%	39.6%	36.8%	62.2%
	そう思う	11.8%		25.4%	
19、大人社会の問題が影響していると思うから	わからない	1.5%		2.8%	
	全く思わない	0.8%		1.6%	
	あまり思わない	7.2%		17.7%	
	ややそう思う	37.3%	90.5%	44.5%	77.8%
	そう思う	53.2%		33.3%	
20、教師の権威が低下したから	わからない	2.3%		4.9%	
	全く思わない	11.0%		3.7%	
	あまり思わない	36.4%		27.3%	
	ややそう思う	34.5%	50.4%	40.8%	64.1%
	そう思う	15.9%		23.3%	
21、教師の指導力に問題があるから	わからない	5.3%		4.4%	
	全く思わない	6.1%		1.2%	
	あまり思わない	45.1%		21.7%	
	ややそう思う	36.4%	43.6%	59.4%	72.7%
	そう思う	7.2%		13.3%	

No. 4	質問項目	1998年度	割合 (%)	2019年度	割合 (%)
22、『荒れ』や生活指導上の問題についての話し合い	わからない	7.7%		3.0%	
	全く思わない	13.8%		6.1%	
	あまり思わない	26.9%		11.2%	
	ややそう思う	33.1%	51.6%	39.2%	79.8%
	そう思う	18.5%		40.6%	